九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

萩の風景 ： 夏蜜柑、土塀、「萩の女」

小野, 恵
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程・平成十四年修了

https://doi.org/10.15017/8483

出版情報：九大日文. 5, pp.312-316, 2004-12-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

萩の風景

――夏蜜柑、土塀、「萩の女」――

小野恵（ONO Megumi）

一　近世の都市遺産・萩

山口県の北西部に位置する萩市。東の松本川と西の橋本川にはさまれた三角洲を中心に、毛利三十六万石の城下町として発展した町だ[1]。また、吉田松陰、高杉晋作、伊藤博文などを生んだ、言わずと知れた「明治維新胎動の地」である。

江戸時代の町割りや町並みが、今もほとんど変わらず残り、当時の古地図を片手に町を歩くことができる。「堀内（ほりうち）」、「平安古（ひやこ）」、「浜崎（はまさき）」の三地区が、国の重要伝統的建造物群保存地区に認定されている[2]。三方を山に囲まれ、残り一方は日本海に面しているという閉鎖的な地理的条件のほか、さまざまな理由が重なって、近代の都市開発、そして戦火を免れた。「近世の都市遺産」が現代にそのまま残った町として、全国的に貴重な存在になっている。

その鋭い歴史的洞察で知られる司馬遼太郎は、『萩―維新こぼれ話』（昭和四十年十二月『週刊文春』）の中で、萩の町を、「時間の侵食を声もなく待っているような感じの町」と形容し、次のように書いている。

> この地にこの町ができたのは、地政学的な必然性によるものではない。関ヶ原の敗者になった毛利家は、中国八カ国の国主から転落して防長二州にとじこめられた。（略）家康の幕僚たちは、この毛利家を危険視し瀬戸内海岸に作らせなかった。ことさらに奥へひっこませ、交通に不便な日本海側の萩をえらばせた。そういう理由でこの町はできた。
>
> 交通経済上の必然性もないために、明治後はおなじ山口県でも、山口市や下関市にその繁栄をうばわれた。このためにこの城下町は近代化による破壊をまぬがれたが、同時に近代からとりのこされるはめになった。（傍線論者）

萩という町が語られるとき、この「とりのこされた」というイメージは常につきまとう。そして、それは、「夏みかん」[3]、「くずれかけた土塀」など、哀愁を帯びた歴史の残像としての風景をもって語られることが多い[4]。次に挙げるのは、永松定「波の音」（昭和三十四年一月『日本談義』）の一節である[5]。

> ミカン畑のなかの道を行くうち、ふと片側に黄褐色の荒壁の土塀が現われ、如何にも古い武家屋敷らしい作り構えに、眼にしみるような土蔵の白壁が見えたりしたが、そこにも人影ひとつ見えず、話し声ひとつ聞えないのだった。（略）萩というところは、ギラギラ輝く、夏の真昼の日光のなかに、まるで死の町ででもあるかのような、深い沈黙

が領していた。あるいはまたこの真昼のけだるさのなかに、誰もかれもが、死んだように、忘却のなかに、眠りほうけているのかもしれなかった。（傍線論者）

ここでは、「死の町」、「深い沈黙」、「忘却」という言葉とともに、「ミカン」（夏みかんのこと）と「土塀」の風景が描かれている。

続いて、このような萩の風景の一つとして描かれた「萩の女」について挙げる。

二　中野重治　『萩のもんかきや』

中野重治の『萩のもんかきや』は、昭和三十年十月に書かれた随筆風の短篇である。「厄介な用事」で萩を訪れた中野は、用事がすんだあと、萩の町をぶらぶらと歩いている。そして、郵便局（現在、田町商店街にある田町郵便局のこと）のまん前にある菓子屋を目にし、旅にでても土産を買ってこないといつも非難していた娘のことを思い出し、ふと店に入る。その店で目についたのは、「夏蜜柑の砂糖漬」だった。

この店は、今でも夏蜜柑の丸漬けを製造している「光圀本店」という店である。「夏蜜柑の砂糖漬」は、今でも変わらず、萩のお土産として代表的なものだ。旅館や観光地などでは、必ずといっていいほど、萩焼の茶碗で点てられたお茶と一緒に、この甘い菓子が勧められる。

さて、その「夏蜜柑の砂糖漬」を買って、ふたたびぶらぶら歩きだした中野は、「妙なもの」を見つけた。小っぽけな店、ガラス戸の向うにこっちを向いている女が目に飛びこんできた。ずいぶんと、鼻の高い女だ。

あかるいガラス戸を前に、女は小机のようなものを控えて坐っている。（略）ひどくうつむいて、何か小さいものにとり組んでいる。（略）右手に細筆をにぎっている。その穂がおそろしく細い。（略）それを、穂先が手前へ傾斜するくらいの角度できゅっと握っている。左手には壷のようなものを握っている。渡し一寸くらいの竹の筒か何かのようなもので、中に黒い釉薬ようのものがはいっている。右手の筆の穂が、針でつっ突くといった式で左手の小壷をちょっちょっとつつく。

中野はしばらく、女が何をやっているのか分からず覗きこんでいたが、それが羽織へ紋を入れているのだと分かり、「ほっとした」と同時に、「疲れ」がでる。

私はすぐそこから離れた。見ていられないようなところがそこにあった。（略）離れる拍子にやはりそこに看板のようなものが出ているのが見えた。

「もんかきや」

木の小さい板に、仮名でそう書いて打ちつけてある。

ああ、「も、ん、か、き、や」か。もんかきや、もんかきや・・・・・・

私は、「もんかきや」という言葉をはじめて見た。あった言葉かも知れない。

中野は、「あんなことで商売が成り立つのだろうか。この節は、紋つきなんというものはもうはやらなくなっているのだろう」などと思いながら、もうひとつの札を目にする。「戦死者の家」という札。中野は、そこに「あたらしい辛さ」を見、萩をあとにする。

当時「もんかきや」があった場所というのは、萩のほぼ中心部に位置する田町商店街の一角。「もんかきや」のあとは、今は手芸店となっている。小説中に出てくる女性は、三隅智恵子さん（現在八十四歳）。明治中期に、父親が創業した店を継いだ二代目だった。

萩では、八十年代前半まで、城下町の趣が残り、女性たちの正装は和服が主流だった。現在も自宅で「もんかきや」を続けている、智恵子さんの姪で三代目の節子さん（五十七歳）の談話によると、「卒業、入学式が迫った毎年一、二月は羽織、訪問着などに家紋を入れる注文が殺到して。毎日早朝から深夜まで。睡眠時間はたったの二、三時間だった」（讀賣新聞地方版に掲載・平成十六年九月二十五日）ということだ。

着物を着る人も減り、都市ではおそらく「もんかきや」は、楽に生計をたてる商売としては成り立たなくなっていたのだろう。しかし、現にその商売を黙々と続けている女を、中野は目の前に見た。そして、「西洋人のように高い鼻」をもった女が、時代から消え去ろうとしている「もんかきや」で、生計をたてている姿を目に焼きつけるのである。下を向いて黙々と仕事を続ける「もんかきや」の女に、中野は、「萩」のまちの深部を見たのだろう。

三　郷土民謡　『男なら』

数百人の婦人がレコードにあわせて、剣舞を想わせるような踊りを踊っている（中略）それだけなら何でもないのだが、その歌の文句は、今どき、よそでは聞けるものではない

これは、大宅壮一「萩―見はてぬ夢の町」（昭和二十九年五月『週刊朝日』）の一節である。萩を訪れた大宅は、公民館で萩の民謡『男なら』（オーシャリ節）を耳にする。昭和二十九年、戦後二十年を迎えようとしていた頃だ。

男なら　お槍かついで　お仲間となって
ついてゆきたや　下の関
尊王攘夷と　聞くからは
女ながらも　武士の妻
まさかの時には　しめだすき

神功皇后さんの　三韓退治が
かがみじゃないかいな
オオシャリシャリ

この歌は、江戸末期、文久三年（一八六三年）の菊ヶ浜土塁造工事の際の囃子歌として、伝えられる。

この年の六月五日、下関の前田砲台が二隻のフランス軍艦の攻撃により陥落したという報が、萩に伝えられた。萩ではさっそく外艦来攻に備えるため、六月二十五日に菊ヶ浜の土塁築造が開始されたとされる。

『厚狭毛利日記』（山陽町立図書館蔵）によると、菊ヶ浜土塁の築造工事には、「壮年の男女は勿論、三歳の童子、百歳の老婦迄、我を先へと罷出、ツーポ襦袢に小袴、又は緋縮緬のゆもじに緞子の帯、大模様帷子其外、思い思い勝手次第の支度、真宗の僧、御細工人、足軽の男女、或は諸士陪臣迄加勢として罷出で・・・」とある。

この記述から、菊ヶ浜土塁築造には、女だけが参加したものではなく、老若男女、あらゆる階級の人々がこぞって参加したことがわかる。しかし、男の留守を守る勇ましい萩女たちの印象がよほど鮮烈だったのだろうか。現在その場所は「女台場」と呼ばれ、囃子歌『男なら』とともに語り継がれ、「萩女」のイメージのひとつとなっている。

さて、大宅は戦後間もない頃に、『男なら』を大真面目に練習する萩の婦人たちを見て、驚いている。この歌は、村田峰次郎。著『防長近世史談』（昭和二年十月・大小社）によれば、大正の頃はほとんど忘れられていたそうだが、昭和十年、萩市の助役であった市川一郎の母タツ（当時八十六歳）が覚えていたものを復元し、その後普及したものといわれる。

大宅は、この歌が今では郷土民謡として復活し普及していることは、「この町の性格」で、その萩の町はまるで「荒城の町」という感じだと形容している。そしてこの風景は、現在に至るまで連綿と受け継がれている。地元の祭りなどでは、白い袴に槍をかつぎ、たすきに鉢巻姿の婦人が、スピーカーから大音量でながれる『男なら』の歌にあわせて、実に勇壮な踊りを披露するのである。

時代を切り開いた幕末維新の志士たちの伝記や歴史小説は数多くある。しかし、それを影で支えた名もなき萩の女たちの幻影が、今もこのまちには残り、それが、ほんとうの意味での「萩」を体現しているように思われるのだ。

萩への旅行者は、他の土地なら滅びさっていたかもしれないものを間のあたりにし、驚きと同時に、「古い日本」を懐かしむ。

それは、今でも変わらない。武家屋敷には今も人が住みなしている。それらの人は風景の一部となって、「とりのこされた」町並みに溶けこんでいく。「夏みかん」、「土塀」、そして「萩の女」は、これから先も変わらずにそこに在り続けるのだ。

【注記】

1　おりしも今年は、毛利輝元が萩に移ってきて四百年。この小さな町では、「萩開府四百年」の節目の年ということで、様々な記念行事も開催され、静かに盛り上がっている。

2　堀内地区と平安古地区は武家屋敷の町並みとして、昭和五十一年（一九七六年）に、浜崎は、港町の伝建地区として、平成十三年（二〇〇一年）に、それぞれ認定された。

3　明治維新を待たず、萩の政治機能が山口へ移され、さらに新政府の秩禄処分によって、士族は禄を失う。夏みかんの栽培は、失業武士の救済事業として、旧長州藩小幡高政が、明治十年（一八七七年）頃から、経済栽培を奨励して定着したもの。今でははからずも、武家屋敷からのぞく夏みかんが、萩の風物詩となっている。

4　現代作家・高樹のぶ子氏は、萩のまちを次のように描いている。「萩の町には灰色の凛々しさがある。（略）冬の雨の日など、重い雲に押さえつけられた大地の底から、どどおん、どどおん、と重い太鼓の音など響いてきそうな気がする。それが北の海から打ちつける波音なのか、土深く埋めこまれた武家たちの魂の声なのかわからないが、そんな日こそ、この古い町が息を吹き返すように、典子には思えるのだった」萩の町は、このように山陰の陰鬱さとともに描かれてもいる。

5　永松定。明治三十七年（一九〇四年）、熊本県玉名郡生まれ。昭和初期、伊藤整らとモダニズム運動を推進。昭和六十年（一九八五年）没。

6　「もんかきや」は、立原正秋の随筆、『萩・長門紀行―今なお もんかきやが残る町』（『アイ』昭和四十七年・六月創刊二周年特大号・主婦の友社）にもでてきている。その中で、立原は「もんかきや」を「滅びゆくものの美しさ」と形容している。

7　光圀本店は、明治十三年から夏蜜柑の和菓子をつくってきた。「夏蜜柑丸漬」は、三代目光圀義太郎が大正十五年に考案した、夏蜜柑をまるごとった砂糖漬けの菓子。実を繰り抜きあく抜きした夏みかんの皮を砂糖でじっくり煮込み、中に夏みかんの香りの白羊羹を流し込んだもの。全ての工程が手作業なので、仕上げに五日かかる。

8　歌詞は、「三韓退治が」が「雄々しき姿が」に、「尊王攘夷と聞くからは」が「お国の大事と聞くからは」に改められているが、現在も萩の民謡としてうたい継がれている。また、「萩の女」といえば、三好達治、河上徹太郎、井伏鱒二の三人の防長紀行『三人旅の記―防長行脚』（昭和二十七年七月『群像』）の中にも登場する。河上は、萩焼に「岩国おとこに萩女」と書き入れた。そして、この句が山口へ行くと、「山口男に萩女」に変るが、「女だけは、いつも萩が動かないのが面白い」と記している。

9　村田峰次郎は、安政四年（一八五七年）萩生まれ。幕末長州藩立て直しの祖、村田清風の孫。山口明倫館に学び、明治十七年（一八八四年）、内閣で伊藤博文の憲法制定事務に参加。明治二十七年（一八九四年）『長周叢書』を刊行後、毛利家に入り藩史編纂を主宰。同四十二年（一九〇九年）、防長氏談会を発足。昭和二十年（一九四五年）没。

（九州大学大学院修士課程・平成十四年修了）